

読書課題

01150024 佐々木詢平

・森の生活 感想文

19世紀にアメリカで活躍した小説家ソローが書いた小説「森の生活」を読んだ。この本の全体像を簡単に説明すると、ウォールデン湖というアメリカ北東部にある湖の辺りで、著者自身が行なった自給自足の生活の中で、著者が触れた自然の美しさや、孤独と瞑想の中で考えたことが書かれている。感想を端的に言うなら、面白かった、である。アメリカにこんな風に人里離れた自然の中で孤独に暮らした人がいたということがなんとも意外で、奇妙な感じすら受けた。作中に描写されているウォールデン湖畔の四季折々の美しい風景は文章だけでは、日本に住む私にはなかなか想像がつかない。そのため、小説のところどころにあるウォールデン湖畔の写真が情景の想起に大いに役立った。実際にウォールデン湖を直接見てみたいとも思った。しかし、淡々とした自然の描写が全体の内に占める割合が多いため、読んでいて退屈を感じることもなくはなかった。また、この本は環境破壊に対する警鐘を鳴らす本でもある。著者はウォールデン湖畔の美しさから自然一般までその美しさを敷衍して、そんな美しい自然をこれ以上破壊するな、というような趣旨のことを何度か述べている。環境保護が叫ばれる昨今においては、むしろこの側面からソローに注目するというのが少なくないようである。近年ソローがアメリカ文学界で脚光を浴びるようになったのも、その要因が大きいらしい。もちろん、単に美しいからという理由だけで自然破壊に反対しているのではないだろう。自然は本来、私たちの生活と極めて密接に関係しているからであり、自然破壊が私たちの生活そのものを破壊するかもしれないからだ。現在の科学をもってしても複雑な生態系の多くが未解明であるという。であるから、何か特定の種が絶滅することで、全く関係のないと思われてきたような環境で異常が起こるかもしれないのだ。私は、都市住民の多くが持っていると思われる、生活の外側というイメージの自然観を維持するだけでは今も進む自然破壊を食い止めることはできないように思う。私が強い興味を覚えたのは後者、つまり孤独や瞑想の中で考えたことの方である。工業的労働とそれにあくせく従事する労働者に対する冷ややかな目、人間の第一目的、自然観、奢侈への嫌悪感、善悪について、読んだ本のことなど隠遁者らしいことを語っている。その中で面白かったのは、自給自足の生活で人間は生きていけるということと、そうすれば今よりずっと少ない労働量でいいということである。ソローは「一年間におよそ六週間働けば、生活費を全部まかなえることを知った」と述べているが、本当だろうか。この記述が仮に事実として考えた時、なぜ人間は必要以上の労働をするのだろうかということも考えざるを得ない。恐らく生きているだけなら、それだけの労働量で問題ないだろう。しかし、人々が夢や理想を追い、生きているだけに満足しなくなれば、上に述べた労働量では足りないだろうし、むしろ人々はその労働を進んで受け入れるだろう。もちろん、現実には、夢や理想というよりも、社会構造の中に押し込められているという方が近いとは思う。いずれにしても、現在の日本におい

て自給自足の生活を送って、満足する人は極めて少ないだろう。もう一步進んで考えると、生きていくだけで満足というのは、つまり生き延びることそのものが人生の目的となっている。私はそのこと自体を目的とせず、何か生きがいを見つけて、その為に生きると考える方が好きなタイプである。しかし、短期間で構わないから自給自足の生活を実際に送ってみると、楽しいかもしれない。農作物を種まきから収穫まで行ったり、家を木材の収集から始め組み立てまで行ったりするのである。晴耕雨読といった生活だろうか。何も気兼ねなくさぞのびのびできるのだろう。話は変わるが、著者は効率化の追求のために分業に分業を重ねた工業に疑問を呈しているが、その点については私も同感である。その効率化が誰のための効率化で、仮に社会全体のためだとして、社会全体の福祉や満足をどれだけ増進しているか判然としないからである。少なくとも、そこで働いている人はまるで機械のような作業に従事させられており、あまりに無機質で人間的でないと思う。生協や食堂の壁でたまに見かけるパン工場のアルバイトに応募して、実際に働いた人の体験を聞いたことがあるが、そこで聞いたのは、まさしく機械のやるような単純作業だった。その上、それが数時間続くのであるから、たまったものではない。そこで毎日働いている人は何をモチベーションにして働いているのだろうかと疑問に思った。作中、ギリシャ・ローマの文学や、古代中国の論語や孟子、それから近現代文学の一節を引用する箇所が頻繁にある。著者はハーバード大でギリシャ・ローマの文学について学んだそうなので、とりわけそれらの時代からの引用が多い。西洋の文学だけでなく論語や孟子まで引用する著者の教養にはただただ驚くが、引用が余りに多すぎて、少し術学的にも感じた。恐らくは、自分の教養をひけらかして満足するような類の人間ではなかったのだろうから、私の方が偏った見方をしているだけなのかもしれない。

インディアスの破壊についての簡潔な報告 感想文

ラス・カサスというスペイン人の牧師が書いた「インディアスの破壊についての簡潔な報告」を読んだ。書かれているのは、大航海時代、多くのスペイン人が中南米の地で行なった、虐殺、破壊、掠奪、詐術の数々の内、著者自身が見聞した一部の報告である。中南米の全域に渡って、無辜のインディオに対して行なった残虐な仕打ちに心を痛めた著者がスペイン皇帝に報告するという体裁を取っている。この本を読もうと思ったきっかけは、高校時代に教わっていた世界史の授業に出てきたことである。それで、今まで読まずにきたので、是非この際教養として読んでみようと思ったわけである。その内容は首尾一貫している。とにかく、スペイン人の中南米の様々な地域における残酷な実態を暴露しようとしているのである。これを読むと、目を背けたくなるような残虐な行為が数限りなく現れる。当時の版画が挿絵として、掲載されているのであるが、それがなんとも直接的な絵であり、こんなことを本当にしたのかと当時のスペインの征服者達の神経を疑わずにはいられなかった。加えて、4,500年も過去のことであるが、虐殺されたり、手足を切断されたりした罪のないインディオのことを考えると、胸が痛くなった。後の時代、この本の力もあり、スペイン人は残虐な

非道な人々と他国の人間から見なされるようになったそうである。それには、当時スペインと対立する国々が頻りにその様なプロパガンダを送り続けたという経緯がある。これは、スペインでは「黒い歴史」と呼ばれているそうである。しかし、この本の内容は少なからずスペイン人の残虐性が誇張されており、額面通りに受け取ることはできない。インディオの最大の死因は殺害ではなく、ヨーロッパから持ち込まれた疫病と言われている。であるから、スペインではこの本を全くの出鱈目と見る向きもあり、スペインはインディオを全く殺害しなかったといういわゆる「白い歴史」なる見方もあるそうである。なんとなく、第二次大戦後の日本の南京事件や従軍慰安婦の問題での対立と似た所があるように感じた。しかし、虐殺によって多くのインディオが傷つき、殺されたことは複数の証言からも明らかなように、歴史的事実である。調べて見ると、ラテンアメリカのラテンという接頭語は「イベリアの」という意味で、多くの土地を支配したイベリアにあるスペイン・ポルトガルに由来するそうである。アメリカとは、言うまでもなく、アメリゴ・ヴェスプッチという探検家から取っているから、ラテンアメリカという地名は、先住民の面影を少しも感じさせない無神経な地名であるように思った。しかし、身近なことに目を移すと、アイヌが先住民として暮らし、アイヌモシリと呼んでいたこの地を北海道と名付けたのもやはり似たところがあるように思う。もちろん、個別の土地の名前はアイヌ語から採用している分、まだ配慮されていると言えなくもないが。地球の反対で行われたことも、翻って自分たちの歴史を辿れば似たような歴史はあるのかもしれない。ラス・カサスも当時の価値観で生きている人間であるから、今の価値観とは相容れない所もあった。それは、インディオにキリスト教を押し付けようとしていることである。元々、彼が中南米に赴いたのも、布教が目的であった。彼もまた自分たちの文化こそ一等のものであると信じてやまない一人だった。彼には、キリスト教を受け入れるだけの受容性を持ったインディオに敬意を持っていたが、彼らの独自の文化には、見向きもしていないようにさえ思った。インディオたちの文化が分かるような遺跡はその多くが破壊された。現存の遺跡の中で有名なのはマチュピチュであるが、そのマチュピチュもたまたま高地にあったから、発見されず破壊を免れたに過ぎなかった。こう考えると、当時のスペイン人が南米で行なったことは、本当に業が深いとしか言いようがない。南米の国々の政治や経済が振るわないのも、こうした歴史がそれらに暗い影を落としている一因であるように感じた。だからこそ、歴史を学ばないといけないのだと思う。過去の歴史は今に直結しているのである。過去があつて現在があるのだから、過去は現在の下にある土台である。自分たちの立つ場所をしっかりと理解しておかなければ、その上にある未来を良いものにはできないだろう。これはなんとも既に誰かが言ったことのありそうな言葉である。「愚者は経験から学び、賢者は歴史から学ぶ」という誰かの言葉があるが、全くその通りである。ところで、私は読んでいて少し考え込んでしまったことがある。それは、上陸初期にインディオとスペイン人はどうやってコミュニケーションを取ったのだろうかということである。もちろん、通訳がいたのだろうが、それでも侵略が進むにつれて、侵略者達は方々に四散して、侵略を続けた。その一つ一つのグループに一人は通訳がいたということだろうか。仮にそう

だとして、ではその通訳者はどこでどのように学んだのだろうか。文法を学ぶというより、実用的な言葉だけ学んで、単語の羅列でコミュニケーションを図っていたのかもしれない。こういった外国の歴史の資料となるような本は、あまり呼んだことがなかったのだが、意外と読み物として興味深かった。その理由は知らない事柄がたくさん文中に出てくることで、それを調べたりしてさらに深掘りしていけるからである。そうすることで、色々な知識を身につけることができるので、得るものは大きい。

人間の大地 感想文

サン・テグジュペリの「人間の大地」を読んだ。これは、パイロットでもあった著者の経験に基づいて書かれた作品であるから、半ば自伝のような作品であるとも言えるかもしれない。話は、パイロット駆け出しの頃のことから始まり、アンデス山脈で消息を絶ちその後無事に生還した勇気あるパイロット仲間のこと、アフリカや南米で出会った人々のこと、自身が体験した砂漠での極限状態、そして人間にとって大切なものは何かを問う第 8 章で結ばれる。著者自身が飛行機事故で墜落したサハラ砂漠で、極限の状態に追い込まれたことがあるというのは、衝撃的だった。その章では、言語に絶する渇きに苦しみ、ひたすら歩き続けた著者と僚友が最終的に遊牧民に助けられるまでが描かれているのであるが、私には、「人間はまっすぐ前に進むことができると誰もが思い込んでいる。人間は自由なのだ」と誰もが思い込んでいる。じつは紐で井戸に繋がれているということが分かっているのだ。」という文がとても印象に残った。普段水に困ることのない生活を送っている私たちには思いもよらない言葉ではないだろうか。著者は水を「おまえが生命そのものなのだ」とか「おまえはこの世の最大の富」と述べている。このような心持を理解するためには、やはり著者同様に水に困るという経験をしてみるといいのだろう。そうすることではじめて、水のありがたさが分かり、自分たちの生活の当たり前の豊かさが分かるのかもしれない。自分の生活の当たり前がいかに豊かなものであるかをもう一度見直してみようという気になった。また、和辻哲郎の「風土」ではないが、水などの資源に困らない土地で育った人間と、正反対の環境で育った人間の性質が異なるというのは、むしろ自然なことのように思った。科学的根拠などは一切ないのであるが。当然かもしれないが、この作品には、飛行場面が多い。飛行機の窓から見た地球の姿や上空近くに見える満天の星空、夜中に見た平原の中にぼつぼつと見える人家の光に著者は想いを馳せている。それは、どういう景色なのだろうかと思いつながら、是非見てみたいという気持ちに駆られる。そんな風に飛行機に乗ってみたいものである。パイロットという職業はやはり大変には違いないだろうが、普通は見られない景色を見ることができるという点でとても魅力的な職業であると思った。今では、ドローンが一般に普及するようになって、空からの景色を画面越しに見ることは、さほど難しいことではなくなったが、実際に見ると映像で見るとでは、伝わるものが異なるのではないかと思う。実際に飛行機に乗れば、視覚、聴覚、場合によっては触覚に訴える一方で、映像は視覚のみ訴えるものだからである。著者がパイロットだった時代は、飛行機が誕生して間もないこ

ろのことであり、今のようない機械がほとんどやってくれる時代とは大分異なるという。なにせ第二次大戦が起こる前のことであるから、なかなか想像がつかない。およそ性能の悪い零戦のようなものであろうかと勝手に考えている。ところで、作中に不帰順地域ということが度々出てくる。これは、アフリカにおいてどこのヨーロッパの国の植民地に入れられていない地域のこと、現在の西サハラ辺りの地域が該当する。西サハラは今もどこの国にも帰順していない地域であるが、この時代からどこにも属していなかったとは知らなかった。こういった話になると、私はいつも不自然に直線的な国境線の引かれたアフリカの地図が思い浮かぶ。最終章は哲学的に語られていて、この作品で重要な位置を占めている。この章には、とりわけ多くの格言が収められており、興味深い内容である。内容を私なりに解釈すると、以下の通りである。論理は何でも正しくすることができるから、物事の間には矛盾が生まれる。その矛盾は論理が生み出したものであるから、別段不自然なものではない。しかし、人々の中にはその矛盾を受け入れず、何かに対して排他的かつ狂信的な態度を貫く者がいる。そういった人を著者は批判している。また、人々から生きがいを奪い、目的なく働かせ、人々の中にいるモーツァルトを虐殺する現代社会に疑問を呈している。ここでいうモーツァルトとは、人間一人一人の内部に潜む可能性だということ。こうした指摘を元に、現在の世界を考えると、排他的で狂信的な態度を持った人々が跋扈している。移民の問題にしても、論理を駆使すれば移民受け入れも移民排斥もどちらも正当化できるのだろう。しかし、当然そこには矛盾が生まれる。にもかかわらず、その矛盾を受け入れず、自分たちが正しいのだと主張するだけでは、対立しか生まれないはずだ。だからこそ、そうした態度は退けないといけない。さらに、現代社会においては、意義のない機械的な労働に従事させられ、人生をすり減らす人が少なくない。そのような環境であることが、社会に住む一人一人が没个性的で、活力がないことの一因となっているのではないだろうか。